

## 日本比較文化学会関西支部・関東支部合同例会 発表要旨

研究発表（第1室）13:00～16:00 臨光館 208

司会：丸橋良雄（京都大学）

①奥山裕介（日本学術振興会特別研究員・大阪大学大学院）

「19世紀コペンハーゲンの娯楽スペクタクル文化と北欧地域像の関係—ヘアマン・バング『化粧漆喰』におけるティヴォリ遊園をめぐって」

1843年にコペンハーゲンの西側区域の市壁外に開設されたティヴォリ遊園は、パリで流行する娯楽文化をいち早く北欧の都市空間に再現し、従来の王立劇場に拮抗する市民主導の近代的娯楽スポットとして内外の関心を集めた。オリエンタリズムを基調とするティヴォリの園内空間は、トルコ風のカフェやパノラマ館などの最新の娯楽施設を備え、近代ヨーロッパの都市生活と非ヨーロッパ世界の異国情緒を同時に享受する機会を市民に与えた。作家ヘアマン・バングは、ティヴォリ創立を境に近代化を遂げたコペンハーゲンでの生活を通じてパリ文化を擬似的に体験し、空間メディアとしてのティヴォリに代表される近代都市像を小説『化粧漆喰』*Stuk*（1887）に反映させた。本発表では、ティヴォリ周辺の開発に伴うコペンハーゲン都市生活の変貌という歴史的経過を縦軸に、近代都市文化の模倣に伴う周縁ヨーロッパ市民社会のアイデンティティの推移を、文学テクストの表象に依拠しながら考察する。

②國井 裕（サイバー韓国外国語大学）

「日韓道德教育にみる愛国心の様相」

本発表は、日本と韓国の道德教育においてとり扱われている愛国心の様相を比較し、その特徴を明らかにすることを目的とした。愛国心の考察にあたっては、現行の「小学校学習指導要領」および「小学校教育課程」、これらに準拠した「副読本」および「教科用図書」などの文献資料を中心に分析を行った。その結果、日本は愛郷心型、韓国は忠誠心型の愛国心の育成に重きを置いていることがわかった。日本は、愛国心を愛郷心の延長線上にあるものとして扱っており、郷土の伝統・文化・自然の尊重および継承を強調する傾向にあることが明らかになった。また、政治共同体としての国家への忠誠を説くことに関しては慎重な姿勢がうかがえた。一方、韓国の場合、伝統文化の尊重に関する記述はあるものの、これらが主たるものとはなっていない。独立運動家の生涯を通して祖国の大切さを説き、海外同胞が世界各地で活躍する姿を描写することにより、国家への忠誠心を重んじ民族意識の高揚を訴える傾向にあるといえる。

③木塚恵子（京都女子大学非常勤講師）

「英語絵本の世界が育むもの：大学生への効用を探る」

昨今、人との関わりに苦手意識を抱えている学生を多く目にする。学生のコミュニケーション不安は少人数で行われることが多い語学クラスから楽しさを遠ざけている。さらに苦手なだけでなく英語を『教科』としてとらえ生活の中の身近なものと感じていない。

そこで絵本の読み聞かせが子どもの成長に有益とされるように、親しみやすく平易な内容の英語絵本の活用が成人学習者にも役立つという仮説の検証を行った。

初級レベルの大学生を参加者に、教師が英語絵本を読み聞かせたあとで内容を要約させる。一週間後にあらかじめ指定した数人の学生がクラスメイトに同じ絵本を読み語りする。すると正確さが要求されると感じ苦手意識が強かった通常授業に比べ、物語を追う過程で一字一句にとらわれず曖昧さも楽しめるようになっただけでなく、挿絵や声の調子など英語以外の要素からも積極的に意味を取ろうとした。さらに内容要約を通して登場人物の気持ちや著者のメッセージをくみ取ろうとしたり、相手の反応を見ながら工夫して読み語りをしたりと、他者の考え・感情を推測しようとする力がつくなど様々なコミュニケーションストラテジーを駆使するようになることがわかった。音声だけのCD利用よりも互いに向き合い読み聞かせをする有益さも確認された。

④西川美香子（京都大学国際交流推進機構）

「海外留学前の準備英語講座 — インストラクショナルデザインに基づくコースデザイナー —」

オーストラリア海外研修プログラムは京都大学の協定校のうち豪州にあるシドニー大学（異文化系コミュニケーションプログラム）とニューサウスウェールズ大学（サイエンスコミュニケーションプログラム）との間で新たに作られたプログラムである。本プログラムの特徴は、効果的な学習効果を得るためにインストラクショナルデザインに基づきコースデザイン（海外研修プログラム）、コンテンツデザイン（英語演習事前講義）、レクチャーデザイン（教材の選択、講義で取上げるトピックの選択）がなされていることである。さらに、本プログラムは全学共通科目の集中講義として単位認定されており、加えてこのプログラムを補完する形で英語事前講義が全学共通科目に設置することで従来の英語カリキュラムとの一貫性を保てるようにした。本研究発表では、海外研修プログラム前に行われる英語演習事前講義について、その特徴と学習効果を高めるために実践したコースコンテンツについて報告する。

⑤中村友紀（関東学院大学）

「抵抗のスペクタクルとしての復讐劇：『アントニオの悲劇』の仮面劇」

16世紀後半から17世紀初めにかけて、イングランドでは復讐劇がブームともいえるべき興隆を見た。当時の多くの悲劇には、復讐完遂に至るプロットが含まれている。注目したいのは、復讐劇ジャンルにおいて、劇中劇、特に仮面劇が、復讐場面の常套的背景となっている点である。この発表では、John Marstonの *Antonio's Revenge* (1600年) を主に取り上げ、同じモチーフを含む他の作品を比較対象としながら、復讐場面での仮面劇の役割を検証する。仮面劇とは、現実には近代初期の権力構造の強化に一役買ったメディアであった。そのような役割を持つ表現形態が、レジスタンスや権利の主張と同根の復讐心性と、逆説的な関連性を持つ点を考える。また、劇を観客として享受していた近代初期イングランドの人々の復讐概念・イメージが、様々な知識・情報から構成されていた点を検証し、復讐の表象を求めた民衆心性を考察する。

⑥鈴井宣行（創価大学）

「川端康成における“感性の美学”について—『伊豆の踊子』の《擬音語》表現を通して—」

なぜ欧米語では日本語が有するイメージを拡げていく的確な表現が醸し出せないのか。それは、感覚美の相違であり、言語的表現様式の繊細さの相違ではないか。中でも日本語に存

在する「擬音語」あるいは「擬態語」による表現はその繊細さを豊穡なものに創り上げて  
いる。川端作品を英訳しているサイデンステッカーは「川端氏は擬音の使い方が実に微妙で、  
これに成功している。その最も有名な例は「伊豆の踊子」の中に出てくる「ことこと笑う」  
だろう。これも英訳を試みたが、失敗に終わった」と、述べている。本発表では、『伊豆の  
踊子』の中で使用されている動詞をより繊細に表現せしめる擬音語表現—1. 顔・歯、2.  
身体の動き、3. 自然、4. 心、5. 楽器などに関して—を取り上げ、擬音語の清音、濁音  
などにも目を向け、それらの日仏語表現を比較しながら、繊細さの相違を考察し、日本語表  
現の醸し出す感覚美が日仏の読者の中に如何に入り込んでいるのかも合わせて考察するこ  
とを目的とする。

## 研究発表（第2室）13:00～16:00 臨光館 209

司会：長谷部陽一郎（同志社大学）

### ①任 天輝（同志社大学大学院文化情報学研究科）

「中国語への翻訳時における表現構造に関する一考察—英字新聞の見出しを中心に—」

本研究は、英字新聞の見出しを例として考察し、英字新聞の見出しの語彙面における特  
徴と修辞面における特徴を分析し、原文と訳文の対照分析を通じ、中国語への翻訳時のル  
ールを解明し、翻訳時のテクニックを明らかにすることを目的とする。

本研究では、中国のバイリンガルバージョンホームページに掲載されている英字新聞か  
ら収集した新聞記事の見出しを取り上げ、原文と訳文の対照分析を行う。まず、見出しの  
語彙面における特徴について考察する。次に、見出しの修辞面における特徴について考察  
する。その結果、原文と訳文の対照分析を通じ、両言語の特徴を把握し、中国語への翻訳時  
のルールを解明し、異文化による翻訳のずれの解決方法を考察し、翻訳時のテクニックを  
明らかにする。

研究の知見により、英字新聞に不慣れな英語学習者にとって、英語力を身に付けること  
ができ、見出しを気軽に読めるようになり、それによって、中国における英語学習者は見  
出しを通じて世界中のニュースと異文化の理解も深まることが期待される。

### ②川口 さつき（早稲田大学日本地域文化研究所招聘研究員）

「曲従のパロディとしての「心中未遂事件」—平塚明（らいてう）の塩原事件を巡る一考  
察—」

平塚らいてう（本名・明）（1886-1971）といえは自我の尊厳と権威を主張し実践した主  
体的な姿が一般的であるが、青年期に森田草平と起こした「心中未遂事件」（1908年）にお  
ける平塚の言動を見ると、事件終盤まで「まったくの受身」だったと平塚が書くように、  
むしろ「従」が基調である。理不尽な要求に対しその直曲を問わずに従うことを「曲従」  
といい、これは儒教的婦徳の中にも謳われているが、同事件における平塚の言動は、いう  
なれば「曲従」の連続である。平塚といえはこれら婦徳を奨励する家父長制的価値観に反  
逆した人であり、この事件に関する先行研究にもそのような平塚の「反逆する精神」を読  
み取ろうとする論考が目立つが、「従属物」であることを拒んで「主体的存在」を主張した  
というよりはむしろ、そのような厭わしいものを易々と引き受けて平気な自分を楽しんで  
いる平塚の姿が、同事件からは繰り返し浮かんでくる。これ見よがしの「曲従」によって、  
結果平塚が関係全体を支配したこの事件は、平塚による「曲従」のパロディとみることも  
出来る。本発表では、同事件における平塚の「従」に注目することを通して、平塚的自我  
主義の広がりやを考察することを目的とする。

③末富浩（京都大学人間環境学研究科研究員）

「エドモンド・バーク『自然社会の擁護』のパロディー性について」

フランス革命批判の書である『フランス革命についての省察』で知られ、保守主義政治哲学の祖とも呼ばれるエドモンド・バークに、『自然社会の擁護』という作品がある。36歳という当時としてはかなり遅い年齢で英国の下院に入り、アメリカ革命やフランス革命といった近代政治史上の大事業に遭遇しながら、約30年にわたり活動的な政治生活を続けた彼が、まだ、職業政治家になろうという明確な意図も希望も有していなかった27歳のときに書いた作品である。

この作品は、ボリングブルックという人物の教説、とりわけその自然宗教論を揶揄したパロディーである。現在、このことを真っ向から否定している——つまり、この作品で展開された議論がそっくりそのままバークの真摯な主張である、とする——研究者は存在せず、このこと自体に議論の余地はない。だが、この作品をパロディーであるというとき、そのパロディーであるとはどのような意味なのか、といった問題や、あるいは——このことと関連するが——、この作品はなぜこのような体裁で書かれなければならなかったのか、といった問題については、いまだ十分に論じられていない。

我々の考えでは、バークは人間の本性(human nature 人間的自然)のうちにある逆説を見しており、この逆説をめぐる彼の理解が、この作品をこのような形で構成させることになった。

バークはこの作品で、ボリングブルックの文体を忠実に再現しながら、ボリングブルックならばひょっとして言っていたかもしれないと思われそうなこと、しかし実際には決して言うはずもないことを主張するという演技を演じている。この演技はどのような性格の演技であり、そしてバークはなぜこのような演技を演じなければならなかったのか？『自然社会の擁護』というパロディーの、そのパロディー性の意味を問うことを通じて、この作品が単に、後に政治思想家として名を残すことになる人物の、若書きの習作にとどまらない意味を持つ作品であることを示したい。

④塩田英子（同志社大学嘱託講師）

「防災意識の語用論：反復がまねく危機感の喪失について」

東日本大震災以降、自然災害に対する各界での注目度はこれまでになく高まっている。とりわけ、言語研究の分野においては関連性理論の立場から、有事のコミュニケーションを分析しようという試みが盛んに行われつつある。たとえば新井(2011, 2012)や杉原(2012)の研究では緊急事態においてどのような情報伝達が必要であり、また、有効であるかを考えるうえで大変興味深い。本発表では緊急事態のコミュニケーションが円滑に進められるために必要な被災者側の防災意識に焦点をあてる。そして、防災訓練の繰り返し、危機感の希薄化、ひいては喪失につながりかねないことを、関連性理論の立場から考察したい。その際に京都府内の大学に通う学生およそ350人に対して実施した独自のアンケート結果を紹介しながら、防災意識の傾向と防災に関する知識の定着、記憶との関係をさぐっていく。

⑤西山幹枝（立命館大学）

「日本語の主要部内在型関係節の関連性理論による分析」

本発表では、日本語の主要部内在型関係節と通常の関係節の語用論による解釈の違いを関連性理論(Sperber&Wilson, 1995)の観点から分析する。最初に、主要部内在型関係節のデータを提示し、その特殊な構造について考察する。そして、Kuroda(1992)が指摘する、主要部内在型関係節を解釈する際、聞き手の語用論の知識を必要とするが、通常の関係節を解釈する際は、聞き手の語用論の知識を必要としないという説を考察する。本発表では、日本語の主要部内在型関係節と通常の関係節は、聞き手がこれらの2つの関係節を解釈する際、どちらの場合も聞き手の語用論の知識を必要とし、異なる機能を持つ接続詞のように解釈すると論じる。そして、日本語の主要部内在型関係節と通常の関係節を関連性理論の観点から分析し、全ての発話は最良の関連性を見込みを伝達すると述べる。

⑥藤枝善之（京都外国語大学）

「映画で学ぶ英語の丁寧表現」

物事を直接的に言わずに婉曲・丁寧に言う—このような表現法は日本語だけでなく、英語にも様々な形で存在する。本発表では、would などの助動詞、過去時制、進行形を使った英語の丁寧表現を概観し、『赤毛のアン』等の映画で使用されている例を確認する。さらに would を含む文について、仮定法との関係を検証する。すなわち、would を含む文に条件を表すような副詞節が明示されていない場合、「この would は独立の文にも用いられる。その場合、一般に、『もしできるなら、もし事情が許すなら』などという言外の含意が加わり、より間接的で丁寧な柔らかな表現となる」（安井編『コンサイス英文法辞典』1996）などと、言外に学校英文法で言うところの仮定法条件節を伴うと説明されることが多い。しかしこれらの文が、必ずしも従来言われているような「言外の if 節（特に仮定法条件節）」を伴わないことを、用例の検証によって明らかにしたい。

研究発表（第3室）13:00～16:00 臨光館 210

司会：金志佳代子（兵庫県立大学）

①諸 芸穎（同志社大学大学院文化情報学研究科）

「杭州方言の諸特徴に関する一考察—単数概念を人称代名詞の複数で表す表現を中心に—」

本論文は、杭州方言の単数概念を人称代名詞の複数で表すという言語現象に着目し、この言語現象を中心として、杭州方言の諸特徴に関して考察を行うものである。杭州語話者を対象としてアンケート調査で収集した言語データを分析した結果により、杭州方言の単数概念を人称代名詞の複数で表す表現の生成原因、具体的な使用条件、非使用条件はすべて「親密度」によって説明することができることを示す。つまり、杭州方言には、「親密度」が高ければ高いほど、単数概念を人称代名詞の複数で表す傾向がある。そして、「親密度」により、以下のように、杭州方言の単数概念を人称代名詞の複数で表す表現の使用条件と非使用条件も明らかにする。

使用条件：

- ①自分との関係のある人間、愛情を含み、人間として扱うモノ。
- ②自分との関係のある場所、主観的にその関係を緊密にしたい場所。

非使用条件：

- ①客観的に見られるモノ。
- ②自分との関係のない場所、主観的にその関係を緊密にしたくない場所。

②岡本慎平（同志社大学大学院文化情報学研究科）

「～がある」構文に関する意味分析ーその程度性をめぐってー

本発表では、動詞「ある」とガ格が結合した「～がある」構文のもつ機能について考察を行う。「～がある」構文に関して、ある時間軸上やある場所に事物や事象の存在を示す機能があることを指摘する研究は盛んに行われているが、「～がある」構文がもつ程度表現機能に関する研究は、管見では見当たらない。

程度を表現する機能をもった「～がある」構文は、身近にいくつも存在する。例として、「私は熱がある。」「今日は風がある。」「今日は波がある。」等が挙げられる。これらの例文は、熱や風、波といった事象や事物の存在を主張しているわけではなく、ガ格名詞の程度の度合いを表している。そのため、本発表では、まず、「～がある」構文が段階性を許容することを証明し、次に、どのようなプロセスで程度表現を可能にしているか明らかにし、最後に、段階性の範囲を限定する程度副詞や量副詞との共起関係から、構文の諸特性に関する考察を行う。

③八野友香（サイバー韓国外国語大学）

「原因理由文に関する日韓対照研究」

本稿は、日本語と韓国語の原因理由文をつくる接続助詞を分析し、二言語間における原因理由文のもつ意味機能の対応関係を明らかにする日韓対照研究である。

日本語の原因理由文をつくる接続助詞は「ので」と「から」が代表的であるが、韓国人日本語学習者が日本語で原因理由文をつくる際、「から」「ので」にすべきところを「て」を用いる誤用例が多く見受けられる。「て」は、固有の意味を持たず、「て」によって繋がれる二つの事態の意味的關係から意味・用法が分類されるため、用法が広範で多岐に渡ることから、習得が困難なもののひとつである。この「て」が誤用される原因の一つに、日本語教育の早い段階から文を繋げるときの接続助詞として「て」が紹介され、安易に使われる傾向があること、もう一つは、原因・理由を表わす韓国語の接続助詞「-서」に対応する日本語の接続助詞として「て」が提示されていることがあげられる。

本稿では、「て」の因果用法と韓国語の「-서」がどのような制約下で対応しうるのかを考察するために、「ので」「から」と韓国語の「-니까」「-므로」の構文論的な特徴を比較し、それぞれのもつ意味機能を明らかにすることで、二言語間における原因理由文の対応関係を考察した。

本稿では、まず因果関係を表す「て」「ので」「から」がもつ統辞的特徴を調べ、それぞれの意味機能を比較した。次に、著者作成の日韓対照コーパスから「て」「ので」「から」に対応する韓国語マーカーを選別した。その結果、「-서」の出現頻度が全体の7割と一番高く、「-니까」、「-므로」の順に続いた。これら「-서」「-니까」「-므로」の統辞的特徴を分析し、「て」「ので」「から」との構文論的分布を比較することで、それぞれのもつ意味機能の領域を特定した。

④河野 康治（京都大学大学院人間環境学研究科）

「姉小路のまちづくり」

京都市の都心中心部に位置し、商業地域に指定されている地域にもかかわらず、中低層で昔ながらの町並みを維持している姉小路地域のまちづくりに関する事例研究である。どのようにすればこのような町並みが実現できるのか、その活動内容について検討したいと思います。住民たちが望む住環境を実現するための都市計画的手法、組織、考え方、地域が持っている文化資源の活用法などのノウハウを豊富に蓄積してきた地域でもあります。それらの研究をおこなうことで今後のまちづくり研究に活かしていくことが本研究の目的です。また行政、学校、専門家、メディアとの関係についても検討を行いたい。

⑤藤田昌志（三重大学）

「北一輝の日本論・中国論」

北一輝は日本が膨張主義、帝国主義を採った時代の中で国家と社会を同一視した。そして国家主義と社会主義の合一を目論んだ。中国革命を日本革命の呼び水と考えた北は辛亥革命の中国に渡り、中国革命に関与した。北は明治維新の「法律上の民主制」の次に実現すべきは「完全な民主制」（=法律、経済両方における完全な民主制）であると考えた（=第二維新革命）。本発表では、右翼青年将校にカリスマとして祭り上げられ、二・二六事件で首魁（しゅがい）の罪で銃殺刑になった北一輝の日本論、中国論について考察する。北の日本論では、明治天皇制国家の位置づけ、社会進化論、生物進化論、制度と「神類」の関係などが問題になる。北の中国論では、北が孫文の辺境革命、国際主義と異なり、国家主義、中央革命のために東洋的共和制を提唱したことなどが焦点となる。

⑥鄒賢（同志社大学大学院文化情報学研究科）

「日本語と中国語における感情表現についての対照研究—人称制限及び構文を中心に—」

日本語と中国語は、周知のように、同じ漢字を用いるという点で共通しているが、両言語の統語構造には大きい違いが見られる。そのような統語的な違いは日中両言語の感情表現においても反映している。感情表現について、さまざまな研究がある。大まかに、語彙論を中心とする研究と統語論を中心とする研究の二種類に分けられる。本研究では、まず、寺村（1982・1984）の観点に従い、統語的な観点から、日中両言語の感情表現において、述語が形容詞によるものと述語が動詞によるものの二つに分類する。次に、中村（1993）の『感情表現辞典』と北京大学中国言語学研究センターの現代漢語コーパスをデータにおける日中両言語での感情表現の使用状況を調査してから、両言語における感情表現に係る制限を導くため、一定の感情を表出する際に、構文の観点から感情表現を対照分析する。最後に、対照分析した結果に基づいて、両言語における感情表現の共通点と相違点を明らかにする。